

Milton の初期の詩の一研究

赤 岩 総 雄

T. S. Eliot は *Essays and Studies*, 1936 に発表した *A Note on the Verse of John Milton* と題する論文において、*L'Allegro* の次の一節を引用して論評を加えている。

- (1) While the Plowman neer at hand,
Whistles ore the Furrow'd Land,
And the Milkmaid singeth blithe,
And the Mower whets his sithe,
And every Shepherd tells his tale
Under the Hawthorn in the dale. (L'All. 63—68)¹

即ち、この一節について、Eliot は「Imagery が全く general である。Milton が見ているのは特定の農夫や乳しぼりの女や羊飼いでない。この一節の感覚的な効果は耳に訴える力によって生れ、農夫、乳しぼりの女、羊飼という概念によってもたらされるものである²」と評している。Eliot は同じ論文の少し前の部分において、*Macbeth* の一節を引用した後で、「Shakespeare の詩行は特定の時に特定の場所に居ると感じるを与える。それに比べると Milton の image は particularity の感じを与えない。Milton の詩には視覚的な想像力が顕われておらない³」というような酷しい論評が見られる所から考えると、上の「Imagery が全く general である、particular でない」という評もまた否定的な立場に立っての評であると考えられる。もちろん Eliot はその後 *Milton* と

1. 以下引用文は Helen Darbishire (ed.) , *The Poetical Works of John Milton*, Vol. II. (Oxford, 1955) による。
2. T.S. Eliot, *Selected Prose*, pp.125—126. (Penguin Books)
3. T. S. Eliot, *op. cit.*, p. 125.

題する論文に於て前の Milton 論に修正を加えて、Milton の視覚的想像力は特定化されない imagery において秀れているのである、というような論評に変えられている。この変化は Eliot の Milton 論の大きな転換としてしばしば問題にされるのであるが、それは本論の直接の問題点ではない。Imagery が general か particular かという問題は Milton の表現法が general か particular かという問題に結びついていると考えられる。Eliot の二つの論文を出発点として、Milton の初期の詩、特に *L'Allegro* および *Il Penseroso* を中心にして Milton の表現法を問題にし、後の詩の表現法との関連において考察してみようと思う。

まず *L'Allegro* の次の一節から取上げてみよう。Eliot が引用している箇所が続く一節である。

- (2) Streit mine eye hath caught new pleasures
Whilst the Lantskip round it measures,
Russet Lawns, and Fallows Gray,
Where the nibling flocks do stray,
Mountains on whose barren brest
The labouring clouds do often rest:
Meadows trim with Daisies pide,
Shallow Brooks, and Rivers wide. (L'All 69—76)

「快活の人」の見渡す風景の一つである。第一に diction の面から考えてみよう。Diction として特に問題になるのは Lantskip, russet, pide 位であるが、Lantskip という語は M. Y. Hughes の註釈によると、当時認められていた語形で、Milton は常にこの語形を用いると云っている。*Paradise Lost* にも数回見られるものである。Milton 特有の詩語というのではなく、OED. によると、17世紀の例文にはすべてこの形が使われていることが判る。Russetとい

-
1. M. Y. Hughes (ed.), *Paradise Regained, The Minor Poems and Samson Agonistes*, p.189. (New York, 1937). 以下一つ一つ断わらないが Hughes の註に教えられる点が多い。

う語も註釈者によると reddish brown or grey の意味で用いられ、Shakespeare などによって好んで用いられた epithet であることが知られる。Pide Daisies もまた当時非常に common な用語で、多くの先例を註釈者は記録している。¹ その他の diction もすべて familiar なものであると云えよう。

次に風景として Lawns, Fallows, flocks, Mountains, clouds, Meadows, Daisies, Brooks, Rivers が取上げられている。Verity は Rivers wide に Thames 河を当てて考えているが、これらの風景の一つ一つは必ずしも特定のものを描写しようとする方向にあるのではなく、「快活の人」が Mirth に導かれて見渡す時、どの地方のどこという限定を受けない一つの典型としてその outline が表現されるという方向にあると考えられる。即ち、一つの理想としての風景を familiar な diction と平易な統語法で描いた一節であると考えられる。確かに Eliot の云う「特定の時の特定の場所」を表現するものではないと云えるが、*L'Allegro, Il Penseroso* において、特定化されない情景ないし生活の状態を表現することは寧ろ Milton が意識的に用いた表現法であると考えられる。*L'Allegro, Il Penseroso* に描かれている場所、情景などが、しばしば some という語を冠せられていることは、particular なものへの表現の方向ではなくて、general なものへの表現の方向を示していると考えてよいと思われる。

- (3) Over *som* wide-water'd shoar. (Il Pen. 75)
 Som still removed place. (Il Pen. 78)
 in *som* high lonely Towr. (Il Pen. 86)
 by *som* Brook. (Il Pen. 139)
 som strange mysterious dream. (Il Pen. 147)
 From the side of *som* Hoar Hill. (L'All. 55)
 Where perhaps *som* beauty lies. (L'All. 79)

1. A.W.Verity (ed.) *Milton's Ode on the Morning of Christ Nativity, L'Allegro, Il Penseroso and Lycidas*, p.78. (Cambridge, 1898) に特に詳しい。以下では度々 Verity の註釈の助けを借りるが、註は省略する。

また *L'Allegro, Il Penseroso* のおのおのの経験の時を示す言葉として、oft(en) が 4 回、some time ないし sometimes が 4 回用いられていることは general な時が意図されていることを印象づけられる。一方 such as ないし such as の意味で用いられた as が 6 回見られる。この比喩表現も一見特殊化されているが、比喩の内容は一つの type に generalize する方向を示していると云える。

(4) Such sights as youthfull Poets dream

On Summer eeves by haunted stream. (L'All. 129—130)

Such streins as would have won the ear

Of Pluto. (L'All. 148—9)

Rosemond Tuve は *Images and Themes in Five Poems by Milton* の中で「地上楽園の原型」という言葉を用いているが¹、(2)で引用した一節の表現法は「快活の人」の見る地上楽園の原型を描く方向にあると考えられる。ここで *Paradise Lost* の第九巻の次の一節の表現法が思い出される。

(5) As one who long in populous City pent,

Where Houses thick and Sewers annoy the Aire,

Forth issuing on a Summers Morn to breathe

Among the pleasant Villages and Farmes

Adjoind, from each thing met conceaves delight,

The smell of Grain, or tedded Grass, or Kine,

Or Dairie, each rural sight, each rural sound. (P.L.IX445—451)

Eve が一人離れている Eden の園を見た時、serpent の姿で現われた Satan が賞嘆する Eden の美しくさがこの一節に喩えられているが、*L'Allegro* における自然の情景の表現法と共通したものが感じられる。Realistic な描写の方法ではなくて、ideal な情景の提示である。*Paradise Lost* における自然の情景を描写する場合の一つの重要な表現法であると考えられる。一つのと限定した

1. Rosemond Tuve, *Images and Themes in Five Poems by Milton*, p.21.
(Harvard,1957)

のは *Paradise Lost* の場合は情景描写の方法に他の二三の型が考えられるからである。

次に *L'Allegro, Il Penseroso* における情景描写のもう一つの方法について考えてみたいと思う。

- (6) 'Less *Philomel* will daign a Song,
In her sweetest, saddest plight,
Smoothing the rugged brow of night,
While *Cynthia* checks her Dragon yoke,
Gently o're th'accustom'd Oke;
Sweet Bird that shunn'st the noise of folly,
Most musically, most melancholy! (Il Pen. 56—62)

表現された *Philomel*, *Cynthia* はかなり particular であるが、*Philomel* を表現する場合に sweet, saddest, most musically, most melancholy という伝統的に用いられた epithet を用いていることは注目しなければならない。また *Cynthia* の image については *Milton* が時々用いる創作的神話であるという解釈をする註釈者もあるが、多くの註釈者は稀な叙述 (allusion) であるけれども、一二先例があることを記録している。また rugged brow of night に類する表現は *Shakespeare* に多く用いられた image であることを *Verity* は注意している。この一節における表現法は伝統的な diction と allusion を用いた情景描写である。これは前に述べた *Milton* のもう一つの表現法であると考えられる。*Il Penseroso* のこの一節と対をなしているのは *L'Allegro* の次の一節である。この一節の表現法も *Il Penseroso* の場合と同じであると云えよう。

- (7) Some time walking not unseen
By Hedge-row Elms, on Hillocks green,
Right against the Eastern gate,
Where the great Sun begins his state,
Rob'd in flames, and Amber light
The clouds in thousand Liveries dight. (L'All. 57—62)

次に *L'Allegro, Il Penseroso* に見られるいわゆる personified abstraction について考察してみよう。

- (8) Com pensive Nun, devout and pure,
Sober, stedfast, and demure,
All in a robe of darkest grain,
Flowing with magestick train,
All sable stole of *Cipres* Lawn,
Over thy decent shoulders drawn. (Il Pen. 31—36)

Melancholy に呼びかけた一節である。この一節には Milton の表現法の一つの特色がよく現われていると思われる。Melancholy の robe は darkest colour であり、stole は black である。Milton の初期の詩においては特に色によって、symbolize する表現法が好んで用いられている。

- (9) O welcom pure-ey'd Faith, white-handed Hope. (Comus, 213)
Or that crown'd Matron sage white-robed Truth. (Fair Infant, 54)
Ore laid with black staid Wisdoms hue. (Il Pen. 16)

これらのいわゆる personified abstraction は allegorical な絵画や masque などにおいて tradition であつたと思われる。従つて masque などに親しんでいた当時の読者には、これらの epithet が最も親しみのあるものだったことが想像される。

また *L'Allegro* の次の一節

- (10) Haste thee nymph, and bring with thee
Jest and youthful Jollity,
Quips and Cranks, and wanton Wiles,
Nods, and Becks, and Wreathed Smiles,
Such as hang on *Hebe's* cheek,
And love to live in dimple sleek;
Sport that wrinckled Care derides,
And Laughter holding both his sides. (L'All. 25—32)

Euphrosyne 即ち Mirth に呼びかけた後で、Mirth に仲間をすべて連れて来いというのである。Masson, Verity, Hughes, Hanford, Wheeler などの註釈を総合してみると、これらの figure はすべて先例があることがわかる。いわば伝統的な figure が組合わされて並べられているということになる。Jollity などは特に masque の dramtis personae として人々に familiar なものだったと考えられる。また wreathed, wrinced などの epithet も先例が相当数あることが註釈者によって指摘されている。Donald Davie は *Purity of Diction in English Verse* の中の特に18世紀の epithet について述べた箇所¹で、‘generalizing epithet’ という term を用いている。そして「epithet は修飾しているものをより精密に限定するものだから、generalizing epithet というようなことは云われないであろうが、18世紀の詩の特徴的な epithet は generalize する効果を持っている²」と云っているが、上の一節に用いられている epithet 即ち、youthful, wreathed, wrinced は familiar であると同時に、generalize する方向に働いて、それぞれの abstraction と couple をなして伝統的に用いられて来たものであるということが出来よう。そしてこれらの epithet もまた、Davie の term の意味するものとは少しずつ来て来るが、同じく generalizing epithet と考えられる。そして表現が generalize されているということが *L’Allegro, Il Penseroso* においては familiar な調子を与えていると云えよう。

Familiar な調子という点で *L’Allegro* の次の一節を考えてみる必要がある。

- (11) How *Faery Mab* the junkets eat,
 She was pincht, and pull’d she sed,
 And he by Friars Lanthorn led
 Tells how the drudging *Goblin* swet,
 To ern Cream-bowle duly set,

-
1. これらの註釈の中で前述の Verity, Hughes と共に *The Golden Treasury* (with Notes by C. B. Wheeler, Oxford, 1949) を参照した点が多い。
 2. Donald Davie, *Purity of Diction in English Verse*, p.47. このことは或程度17世紀に当てはめてもよいと思われる。

When in one night, ere glimps of morn,
 His shadowy Flale hath thresh'd the Corn
 That ten day-labourers could not end,
 Then lies him down the Lubbar Fend,
 And stretch'd out all the Chimney's length,
 Basks at the fire his hairy strength;
 And Crop-full out of dores he flings,
 Ere the first Cock his Mattin rings. (L'All. 102—114)

この一節の Faery Mab の叙述， Goblin の叙述は共に先例も多く，当時の人々に信じられていた迷信であることを註釈者は指摘している。この種の表現は *Paradise Lost* などに特にいわゆる enlarged simile の形で時々用いられるものである。この一節は *Paradise Lost* の第一巻の次の一節と比較される。

(12) or Faerie Elves,
 Whose midnight Revels, by a Forrest side
 Or Fountain, some belated Peasant sees,
 Or dreams he sees, while over head the Moon
 Sit Arbitress, and neerer to the Earth
 Wheels her pale course : they on thir mirth and dance
 Intent, with jocond Music charm his ear;
 At once with joy and fear his heart rebounds. (P. L. I. 781—788)

この一節は第一巻の終りの部分にあって，Satan の輩下の無数の angels (devils) 達を Faerie Elves に喩えたものであるが，表現法は *L'Allegro* の場合と同じであると云える。構文法も *L'Allegro* の couplet に比較すれば多少複雑になっているが，少し前の部分などに較べると遙かに simple である。なお *L'Allegro* の最後の行に見られる 'the first Cock his Mattin rings' の image

1. *Paradise Lost* のこの一節は Tillyard が Milton の表現の homeliness を強調した箇所 (*The Miltonic Setting*, p.117. London, 1957) で引用されていることも注目しなければならない。

は註釈者の説明を俟つまでもなく Shakespeareなどにしばしば見られる familiar な image である。

ここで更に personified abstraction の問題に帰って考察してみなければならぬ。例(8)(9)(10)で見られる各 abstraction はまた morality play の伝統の重要な一部をなしていたものであることは M.Y. Hughes などが指摘している通りである。*On the Morning of Christ's Nativity* においては、この擬人化された抽象概念が更にしばしば用いられて、この Hymn の表現法の中心に居かっていると考えられる。

- (13) Yea Truth, and Justice then
Will down return to men,
Orb'd in a Rain-bow; and like glories wearing,
Mercy will sit between. (Christ's Nativity, 141—144)

更にこういう種類の personified abstraction は pastoral poetry においても時々用いられる表現法であることを M.Y. Hughes は指摘している。

L'Allegro, Il Penseroso には対照をなす passage が当然のことながら多いわけであるが、例(10)の *L'Allegro* の一節に対応するのは次の一節である。

- (14) And joyne with thee calm Peace, and Quiet,
Spare Fast, that oft with gods doth diet,
And hears the Muses in a ring,
Ay round about *Joves* Altar sing.
And adde to these retired Leasure,
That in trim Gardens takes his pleasure;
But first, and chiefest, with thee bring,
Him that yon soars on golden wing,
Guiding the fiery-wheeled throne,
The Cherub Contemplation,
And the mute Silence hist along. (Il Pen. 45—55)

Calm Peace や Quiet は *L'Allegro* の場合の personified abstraction と大同

小異である。次の Spare Fast の personification は註釈者に従うと、Hesiod の Muses の叙述によったものであると考えられる。また次の cherub contemplation の image は Ezekiel の第一章、第十章に基いていることを註釈者は等しく認めている。L' Allegro に見られる abstraction とは少し趣を異にした表現になっていて、可成り particular な gait が与えられているが、これらは今述べたように classical mythology や Bible などの source から得られた gait であることが判る。

最後に次の一行を取り上げてみよう。

(15) Wher brooding darknes spreads his jealous wings. (L'All. 6)

Classical mythology においては night ないし darkness は wing を持った女神と考えられている。Milton のこの行の image もそれに基いていると考えられる。Darkness の epithet はこの例におけるように brooding ないし次の *Paradise Regained* の例におけるように sullen なのである。

(16) for now began
Night with her sullen wing to double-shade
The Desert. (P.R. I. 499—501)

すなわち翼を広げて地上を覆って暗くする鳥の image である。

以上考察して来たことを結論的にまとめてみると、まず、特に自然を描写する場合に general な情景が中心をなして、familiar な調子を与える表現法が意識的に用いられていると考えられる。そして例(6)の場合に見られるように可成り particular な描写が見られる時は伝統的な表現法が用いられ、色々な source から選ばれたものが組合わされて表現されていると考えられる。次に personified abstraction が多く用いられていて表現の大きな要素になっているが、殆ど masque, morality play, pastoral poetry の伝統的表現であって、Milton がそれらの abstraction に幾分 particularity を与えている場合は allusion が有効に用いられていると考えられる。*Paradise Lost* や *Paradise Regained*, *Samson Agonistes* などの後期の作品に於ては、主題との関係もあってであろうが、personified abstraction は稀にしか見られないことも注目すべきことである。

一方情景などが general な描写で提示される傾向は *Paradise Lost* などにもまたしばしば見られる所である。

Tillyard は *The Miltonic Setting* の中で最初に述べた T.S.Eliot の「Imagery が全く general である」という批評に反論して、「Milton は Eliot の云うように general なものしか表現出来ないのではない。general, particular の二つの method を必要に応じて使い分けるのである」と云って二三の例を挙げている。叙述が particular である詩行もこれら二つの詩に見ることは出来るが、矢張りこれらの二つの詩には general で conventional な表現が一貫していると考えられる。このことはこれら二つの詩の主題に関係して来るものである。Kenneth Muir はこの二つの詩の主題を「一人の詩人として、また一人の人間として Milton を満足させ得るような人間の二つの生き方を順番に賞讃しているのである」と云っているが、確かに上述の表現を通して見る時、これら二つの詩に描かれたものは、心配事などから解放された Mirth, pensive な Melancholy という二つの型なのであって、特定の人の mirth ないし melancholy ではないという解釈が成りたつと考えられるのである。Donald Davie は「詩の tone が意味の一面であるとするれば、首尾一貫した tone を保つことは意味を明確にし、言語を純化する一つの方法である」と云っているが、首尾一貫した tone という点から *L'Allegro* および *Il Penseroso* を考察すると、familiar で、conventional な tone で、特定化されない Mirth, Melancholy という一つの型が表現されていると云えるであろう。

-
1. Tillyard, *The Miltonic Setting*, p.96.
 2. Kenneth Muir, *John Milton*, p.28. *L'Allegro, Il Penseroso* には数頁当てられているだけであるが、示唆される所が大きい。
 3. Donald Davie, *op.cit.*, p.61.